
バカと天才と召喚獣

天城 あいる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと天才と召喚獣

【NZコード】

N8951

【作者名】

天城 あいる

【あらすじ】

文月学園2年Fクラス - 彼はFクラスにも関わらず生徒内で『最強能力者 - チートスキル -』と呼ばれていた。学園内で恐れられ、あるいは尊敬され、あるいは慕われる。そんな彼が繰り広げる馬鹿達との日常

プロローグ

俺の名前は高城岬・タカギミサキ。今日、文月学園の一年に進級する。

桜が咲いている文月学園への道を通り、空を見上げると新しい日々の始まりを祝うように、青々としていた。

俺はポケットに手を突っ込んだまま、視線を前に戻す。すると後ろに見知った気配を感じた。

どんづ

軽い音を立てて俺の背中を丂掛けて何かが当たる。

「…岬。何で先に行っちゃうの」

艶やかな黒髪を春の風に翻された幼なじみがそこにいる。

「よひ。翔子」

「……どんづして先に行つたの」

「あー……」

ただ理由も無いのだが、それをいつと「」イツは怒りそうだ。今ももうひとりの幼なじみを握りつぶさん限りに手のひらに力をこめているではないか。

「し、翔子！……いい加減に俺の頭を離せ……！」

「……雄一は黙つてて。これは2人の問題」

「それは分かつてるから岬と充分話し合えばいい……俺が言つてる

のはその事じゃない……！」

「……」

「無視かよ！？」

「そもそも雄一を離してやつたらどうだ？」

「……じゃあ、これについて説明して」

「岬の言つことなら聞くのかクソ！」

雄一の言葉を華麗にシカトし、翔子がカバンからとりだしたのは一冊の本のようだった

『高城岬×坂本雄一

／天才とバカと薔薇の園／

『高城岬総攻め本』

等々。

がたくさん翔子の手に握られていた

「な、なんだこれええ！？！？どうこう事だよ岬！？」

「知るかよ！？気持ち悪つ！！俺は至つてノーマルだつつのありえねえ！！！」

「俺だつてノーマルだ！！」

「俺だつてノーマルだ！！」

そのまま俺たちはその本を茂みに投げ棄てた。

おーこわ。気持ち悪つ

雄二とかありえねえし。

「……この本が出ると言つことは2人が怪しいと言つ」と

「「ありえねえ！！」」

「……息もぴつたり」

翔子は少しふて腐れた顔をして横を向いた。

雄二と俺は鳥肌が立つたのを抑えきれない。誰だよこんなん出版しだやつ…！！

翔子はそれから少しうると機嫌が治り、文月学園が見えてきた
校門の前には鉄人が立っている

「おはようございます鉄人」

「……おはようございます」

「チーズ鉄人」

「鉄人と呼ぶのをいい加減止めないか？霧島は良いとして、高城に

坂本！」

「アハハ。」

「笑い事ではない！！

…ふう、もつお前らには何を言つても無駄だな。」

鉄人から振り分け試験の結果の入った封筒を受けとる。翔子はチラリとそれを見るとまた封筒に紙を戻した

「霧島はAクラスか。当たり前だな

そして高城。」

「はい？」

「俺はお前はやらないでも出来る奴だと思つていた」

「ああ、はい。まあ」

適当にそう返し、やつと封筒の上を切り終えた

「その考えを改めなければならぬよつだな

お前は……

正真正銘の大馬鹿だ

『高城岬 Fクラス』

もちろん雄一もFクラスだった

「そっすね！」

呆れたようにため息をはいた鉄人は、俺たちを早く校舎内に入るよう急かした。

だが、翔子は静かなまま、下を向いていた。

「翔子？」

「……Aクラスだと思ったのに」

「悪いな」

どうやら俺がAクラスでないのが不満らしい。その言葉に、苦笑いで返した

翔子の頭に手を置き、軽く撫でる

「なあ。 そろそろ行かないか？」

「ああ。 そうだな」

翔子の頭から手を退かし、雄一に着いていく。翔子は少しつつ見てから雄一に向かっていった。

「……雄一」、邪魔した

「ぐああっー！」

翔子のアイアンクローラーが、華麗に雄一にめり込んだ

主人公設定（前書き）

バカテス一巻を紛失したので原作が出せません…
とりあえず見つけるか買つか何とかしますので、その前にこちらを
アップしちゃいます

主人公設定

主人公（名前）…高城岬タカヤミサキ

容姿…黒髪に赤茶色の目。
髪は少し長めで、肩につくくらいの後ろで緩くくくつっている。
眼鏡を授業中のみ装備。

備考…頭が良いことを鼻にかけず（ただ明久よりは良いと認識）、
明るいため、男女共にモテる。よく明久や雄二、秀吉と行動してい
るので、腐のつく女子たちに噂されることもしばしば。
一年Fクラスであるが、一年のころ学年一位という記録を持つ。霧
島翔子と坂本雄二とは家が隣同士の幼なじみ。

第一問…春に始まる馬鹿物語

「……ねえ」

「ん？ なんだ？」

「……さつき岬が話していた、大化の革新つていつのこと？」「三年生にもなつてそんなことも知らないのか？ 翔子は馬鹿だなあ。俺は知つてゐるぞ」

「……雄二には聞いてない、岬に聞いてるの」

「ぐあああ！ 痛い！！ 頭が割れるように痛いいー！ー！」

「翔子。手を離してやれよ？」

「……分かつた。」

「はあつはあつ…死ぬかと思つた…

はあ…。で、大化の革新だつける？』

「『無事故の革新』だろ。」

「そうだそうだ。625年だぞ翔子」

「……だから雄二には聞いてない」

「そうだよなつ！ 岬！！ 625年だよなー！」

「はあ？ なにいってんだよ645…『ごふつ！ー』

「625年だ翔子！！」

「……雄二、岬を殴つた。殺す」

「待て待て待てえい！ ほら！ 岬と、デートでも行つてこいー忘れんなよ！ 625年だからなー！」

「……デート、いこう」

「……ただの翔子への嫌がらせじゃないか…」

間違つたことを教えたのは翔子に勉強面で勝てない雄一の嫌がらせだった。

「教室まで送つてこようか？」

「……だめ。大丈夫」

「そりゃ? じゃあ行くな

雄一! いつまで寝つころがつてんだ踏み潰すぞ

「……ばいばい」

「ああ。じゃあな翔子」

校門で別れ、俺は雄一を引き摺つてFクラスに向かった。Aクラスも見てみたが、後でいいや

Fクラスにつく直前。雄一が生き返った。

「ぐあああ!」

「なんだ雄一。寝言か

「なわけあるか天然ボケやんのーー!」

「天然だとー?」

「つっこむとこそこかよー!」

肩で息をしながら叫ぶ雄一に、げんこつをお見舞いした

「うるせえ。田立つだろ」

「ほほお前のせいだけどな。」

「は、意味わかんね」

一人で並んでFクラスに入ろうとしたとき、ドアに挟まつた

「ちつ！…どけよ雄二…！」

「お前が後から入ればいいだろ岬…！」

「俺のが偉いんだから俺に譲れ…！」

「偉いだと…？」

ドアに挟まりながらケンカする俺たちはぞぞ滑稽であらう
だが、この戦い、負けるわけにはいかない

「まあいいや。先はいれよ」

「おおサンキュー」

結局俺が体を退かした

なんだかめんどくさくなつたからだ

「おはよ。岬、雄一」
「おはよ。秀吉」
「おはよ。」

適当なひしゃぶひしゃぶ取る。つかぢやふじとかまじかよ不衛生だな

「秀吉は早いな」
「早く目が覚めてしまつての。岬と雄一に早くではないか」
「俺もそんな感じだ」
……眠くなつたから寝るわ。」
「こきなりじやの……」

座布団を丸めて枕にする。そして寝ついた

「「ダアーリーーン……………」

「…?」

野太い声に体がびくりと反応した。なんだよつさこな

「失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願ひ致します」

起き上がって回つを見渡すと、いまは血口紹介をやつていたらしか
つた

吉井が真っ青な顔をしながら席についた

「あ、次おれか」

「ええ。よろしくお願ひします」

「えーと高城岬。よろしくな」

特に言ひたいこともないしこれくらいにいいだろ

「えー? なんで岬が! ?」
「うるせえぞ蛆虫」
「それ君の幼なじみにも言われたよー」

吉井は関わるところがない。吉井をシカトして席についた

「シカトされたつー?」

それからしばらく自己紹介が続き、前の席の吉井をじるにも飽きたころ、教室のドアがあいた。

「あの、遅れて、すみま、せん……」

お?姫路じゃないか

なぜにこんな辺境の地に(Fクラス)

ねっころがつたまま、周りの奴が姫路に質問したのを聞く。ふーん

…体調が悪かったのか

姫路は吉井の近くに来たため、起き上がつた。

だってあのままねっころがつてたらパンツ見えんだろ。さすがに気まずいだろ

「 も、 繫張しましたわ ……」

吉井が何かしらを思つてか、 やすいとニヤニヤして出したのを予感し、

「あのわ、姫 」

「 より姫路。Fクラスで会うとは思つてなかつたぜ」

とつあえず被せてしまつてみた。 吉井は驚愕してから俺に皿を向け睨み付けてきたので、 逆に満面の笑みを出してみると、
逸らしやがつた。

「あ、岬くん… ?

え、ど、どうして岬くんが… …?」

「おもしろそーだったからー!」

「 もうなんですか… よりしくお願ひしますね

ほわんとした笑顔が印象的ですね。 さすが美少女。

……なに…? 寒気が…

「俺は坂本。 坂本雄一だ

よろしく頼む」

「あ、姫路です。 よろしくお願ひします

深々と礼をする姫路。 育ちの良さが滲み出るつてやつか。

「雄二」が姫路の体調を聞いたとき、すかさず吉井が入ってきた。
吉井を見て驚く姫路。

「「姫路。吉井／明久がブサイクで悪い／すまん」」

「雄二」とハモつた。さすがは幼なじみといったところか。吉井をいじることに関しては容赦しないからな

慌てて姫路がフォローすると、吉井に興味があるやつのことを思い出した

「久保さん?」

「そりいえば、たしか久保がお前に興味があるつていってたな」

「ああ。俺も聞いたぞ。確か……久保」

「利光だつたか」

「.....」

「おいおい。泣くなよ
うざいぞ吉井

「半分冗談だ」

「半分!?」

吉井がでかい声を上げたせいで先生に注意され、パンパンと教卓を叩いた先生が教卓を壊し

…」までボロいとはな

先生は替えの教卓を用意するために教室を出でいった

それに続き、吉井と雄二が教室を出でいく。だいたいの予想がついているので、雄二に念のため後で教えてくれるよう言い、俺はまた眠りについたのだった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8951/>

バカと天才と召喚獣

2011年1月15日22時08分発行